

「ボランティアを通して、人とつながり、それぞれの価値観に出会うことが楽しい」

湯河原へゆづゆづの里

渡邊詢子様(79歳) 平成30年3月 一人入居

演劇に夢中だった日々

父は電電公社の海外駐在員で私は北京で生まれました。戦争が始まる前に帰国し横浜の母の実家に住むことになりました。私が小学校6年になるまで、そこでは母の兄と子供が3人、祖父と祖母、母と私と弟の合計9人が一緒に暮らしました。母は公務員として働いていたので、私は人が困っていたら自分がやらないといけないとお風呂の水汲みや祖母の手伝いをする子でした。中学校、高校では

演劇部に。夏休みは人形劇をするため、ストーリーを考え、粘土を練ったり洋服を作ったり、「人形劇団ひとみ座」に行つて照明を習いました。ともかく創り上げて発表するのが楽しかったわ。高校では『春雷』のおばあちゃん役を白髪の着物姿で演じ、演じる楽しさを覚えました。

ボランティアとの出会い

私は卒業と同時に県庁職員になりました。県庁では色々な分野を体験できました。青少年健全育成の分野では、地方から上京し、就職した青年達が交流する場となる青少年会館の仕事がありました。ある時、自分が企画する教養講座のなかで、お母様のことを書いた優しい詩に出会いました。このような詩を書く方ならば非お話をと、講演をお願いしたところ、「人生の折り返し地点にきたら、世の中に返していきたいと思います」と。それから自分ができる活動を探し出し、「ライトセンター」の視覚障

害者のための墨字の録音サービスのボランティアを始めました。毎月、市の広報を読んだり、幼児のための「テープ雑誌」を作成しました。

37年続けた「悩み相談」ボランティアが私を成長させてくれた

そこで仲良くなったスタッフと話しているうちに今度は「悩み相談」に応募しようということに。二人なら助け合つて頑張れるでしょ。県庁の仕事が終わつてから夜の部の研修に一年間通いました。ボランティアスタッフになる研修ですから費用は自己負担です。それから電話相談の第一線に立ちました。経験とともに自信がついて来ました。10年経ちリーダーに。県庁の定年後には「悩み相談」の事務局長もさせていただきました。事務局長時代、どんな悩みを持っていても自殺は思い止まらなくて欲しいと、専用ダイヤルに取り組みました。ボランティアは無償だからいいの。自分の為ではなく相手の為にしていこう。「悩み相談」は話を聴いて相手に寄り添つていく。それは相手の価値観を認めるからできることです。私も様々な価値観を持った人間の一人なのだと自覚できる様になったことが大きいです。定年後も、「悩

み相談」の他にいくつもボランティア体験をしましたが、やはり人とつながることは楽しいし、工夫次第で成果を上げられる、ボランティアにはそういう達成感がありますね。

ここなら最後まで安心してボランティアも続けられる

私は一人なので75歳になったら入居しようと決めていました。湯河原は、入居している知人が「見に来たら」と声をかけてくれたのがきっかけです。彼女から「手術したときに職員が付き添つてくれた。お見舞いにも来てくれた」と聞くうち、親族に迷惑をかけずに最後まで暮らせると思いました。入居してからトレーナの指導の下ジムで鍛えています。絵手紙やオカリナなどやってみたい趣味も見つかりました。もちろん、悩み相談のボランティアは続けます。80歳になるからどうか…と心配もしたけど、せつかく住んだ町だから、ここでできるボランティアもやってみたいです。今計画を練つてコロナ明けに備えます！



「悩み相談」ボランティアで活躍する渡邊様

